

死脈の変遷について

中川 俊之

日本鍼灸研究会

1 死脈の定義

死脈は大別して、①脈状と病態、治法の間逆順関係がある場合、②脈状自体が予後不良を表す場合がある。②の場合、a) 脈の拍動数に関するもの、b) 四時の脈状(五蔵と胃気の関係)に関するもの、c) 脈状自体で予後不良を表すものの三種類がある。この内、死脈は脈状自体で予後不良を表す脈状である。また、現代中国の『中医大辞典(第二版)』や『中国名詞述語精華辞典』では「怪脈」「七怪脈」「十怪脈」「死脈」を立項するように、「怪脈」の名称が一般的である。十怪脈の初出は、後述のように南宋『決脈精要』であるが、『中医大辞典』(第二版)では元・『世医得効方』を初めとする。

2 死脈の変遷と種類

(1) 『脈経』記載が死脈の原型

死脈の原型は『素問』平人氣象論篇、『難経』十五難に見られる。平人氣象論篇では、「死脾脈」として、「鳥之喙」、「鳥之距」、「屋之漏」、「水之流」、「死腎脈」として、「奪索」、「彈石」を挙げる。『難経』十五難では、冬脈の平脈として「雀之啄」、死脈として「解索」、「彈石」とし、「脾之衰見」として「雀之啄」「水之下漏」が挙げられる。名称が変わったものとして、〈「奪索」→「解索」〉、〈「鳥之喙」「鳥之距」→「雀之啄」〉、〈「屋之漏」「水之流」→「水之下漏」〉が挙げられる。次いで、これらを前提とした『脈経』の記載が後代の死脈の規範となった。平人氣象論篇や『難経』十五難が蔵の死脈(死脾脈、死腎脈)とするのに対し、『脈経』の記載では蔵の死脈という意味はほとんど無い。

『脈経』巻第四・診三部脈虚実决死生第八では、「屋漏」、「雀啄」、「釜中湯沸」が現れれば「朝得暮死」などとして死脈とする。巻第五・扁鵲診諸反逆死脈要訣第五には、「屋漏」、「雀啄」、「彈石」、「解索」、「蝦之游」、「魚之翔」が記載される。「蝦之游」、「魚之翔」、「釜中湯沸」は『脈経』が起源である。後代、特に本篇の注文が、これら死脈の主な説明文となっている。

※『素問』大奇論篇には「脈至如省客」「脈至如丸泥」など多くの予後不良の脈状記載があり、明・呉崑『脈語』にて「怪脈類」として引用される。

(2) 敦煌文書『玄感脈経』に始まる六つの死脈、北宋『脈粹』の七つの死脈

『脈経』以後、『諸病源候論』や『千金要方』『千金翼方』は『脈経』の引用に留まり目立つ展開は無い。敦煌文書の『玄感脈経』捻脈指下轻重脈名類形状第二に至り、六種の死脈を病脈条文と並記した。本書の死脈(「屋漏」、「解索」、「蝦遊」、「魚翔」、「雀啄」、「彈石」=「釜沸」を除く)は、『脈経』巻第五・第五篇にならったものである。北宋の蕭世基『脈粹』は「釜沸」を加え七種の死脈としたが、これは『脈経』巻第四・第八篇の「釜中湯沸」が基となっている。また、『脈粹』は七種の死脈に五蔵を配当し、死脈における五蔵配当の嚆矢となった。

(3) 南宋『察病指南』に始まる「死脈」の名称と、南宋『決脈精要』の「怪脈」

死脈の名称は、南宋の施発『察病指南』巻中・弁七表八裏九道七死脈が初見である。

『察病指南』と同時期の南宋・黎民寿『決脈精要』は「怪脈」として、七死脈に「偃刀」、「転豆」、「麻促」を加えた十種の脈状を記載するが、これら三脈状は『脈経』巻第五・第五篇が元となっている。十怪脈は元・危亦林『世医得効方』(1343)に受け継がれる。

日本では『察病指南』以後、七死脈として記載される例が多いのに対し、中国では元明以後、六死脈、七死脈、あるいは十怪脈、さらに多くは二十四種の怪脈(明・呉崑『脈語』怪脈類)が行われた。

死脈の問題は、①『素問』から『難経』における名称と脈状の変化、②『脈経』での病態変化(五蔵概念の薄れ)と脈状の細分化(蔵の死脈から六種の死脈へ)、③『脈経』以降の変化(死脈の種類、六死脈→七死脈)④複数の名称の併存(死脈と怪脈)などが挙げられる。